

所有物と死

なぜ遺品整理業は登場したのか

関西学院大学 藤井亮佑

1 目的

現代日本は少子高齢化および人口減少という社会構造の変化の中であり、死への関心が高まっている。資本主義社会では、死者の処理である葬儀は産業化・商品化した。しかし、これら死者の処理を終えても、処理できないものが残っている。それが遺品である。現代日本社会では、遺品（「死者の所有物」）の処理である「遺品整理」というサービス、および専門業種である「遺品整理業」が登場した。つまり、現代日本社会における死と死別の問題では、葬儀などにみる死者の処理だけでなく、死者の所有物の処理についても考える必要がある。本研究は、「なぜ遺品整理業が登場したのか」を問いとし、現代日本社会の死と死別の問題を検討していく。

2 方法

調査対象とする遺品整理業は、これまで主に当事者らによるルポルタージュにその存在が言及されてきた（吉田 2006）。しかし、学術的観点からの調査は皆無に等しい。本研究では、関連文献の理論的整理とともに、遺品整理業者（対象 2 社: 塚冨市、西宮市）が行う遺品整理作業空間への参与観察により得た資料の分析を行う。

3 結果

結果として、「遺品整理」では、空間から死者の所有物が排出されていくことが観察された。ここで死者の所有物は（1）死者と遺品整理依頼者との関係性（2）モノの物理的状況という 2 種の要素により、次の 5 つの理念系に分類される。この分類では遺品整理依頼者に継承される①「形見」という象徴的意味を持つモノがある。一方で依頼者が手放すとしても、②「供養品」という象徴的意味の儀礼的処理を要するモノがある。象徴的意味が見出されないにしても、物理的状況から③「道具」として使用価値、あるいは④「商品」として交換価値が新たに価値づけられていく。しかし、遺族のいない無縁死、また孤独死という死亡状況による死臭の被害などによってはモノにあらゆる意味や価値がみいだされず、⑤「廃棄物」とされる。

4 結論

結論として、「遺品整理」における分類には、死者の所有物への新たな意味づけが指摘できる。この背景には、死に際して、モノが所有者という帰属先をなくすとともに、残されたモノの意味や価値も無化していることが考えられる。つまり、遺品整理業の登場には、所有者の死によって帰属先をなくしたモノに新たな意味を与え、再び社会化するための専門産業種および商品サービスが社会的に要求されているのである。当日の報告ではさらにこれを踏まえた理論的考察も提示する。

文献

吉田太一, 2006, 『遺品整理屋は見た!』扶桑社.